
藍—AI—

葉月瞬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藍
|
A
I
|

【N
コ
ー
ド】

NO656X

【作者名】

葉月瞬

【あらすじ】

力ある少女の、苦悩と葛藤。そして逃避行。
人間と獣人の争い。世界の開闢。

アメーバブログの葉月瞬のブログにて、二話まで掲載。

n	h	n	h
t	t	t	t
r	t	r	t
y	p	y	p
—	..	—	..
1	/	1	/
0	/	0	/
4	a	4	a
8	m	8	m
6	e	3	e
3	b	8	b
2	l	1	l
9	o	5	o
4	.	4	.
2	j	6	j
3	p	7	p
.	/	.	/
h	s	h	s
t	h	t	h
m	u	m	u
l	n	l	n
—	—	—	—
	h		h
	a		a
	d		d
	u		u
	k		k
	i		i
	/		/
	e		e

一（前書き）

多少、残酷描写があるかもしれないので、ご注意ください。
萌え属性ではありません。

男がいた。旅をしている。

旅人然とした容姿だ。カウボーイハットを目深に被り、バンダナで口元を隠している。動きやすい貫頭衣に、裾の長いジーンズをはいている。その上からマントを羽織っている。

男は、巨大なクレーターの縁に立っている。縁に立って、じっと、その中心点に倒れた少女を見詰めていた。

と、男が動いた。中心点に向かって、真っ直ぐと疾走して行く。誰よりも早く少女を運び出さねばならぬ。信念の光がその瞳には宿っていた。

少女がいる場所——藍色の力が弾けた中心点——爆心地は、跡形も無くなっていた。それまで彼の地には人の町が存在していた。人の町は戦争の餌食になっていた。焼け爛れた人家や、倒壊した家の下敷きになっていた人間、それまで人間たちが生活していたその跡も何もかも消えてしまった。大きな町だったのだが、その広大な面積はただの土が露出した地面に変わり果てている。その地面には、中心点に向かって筋のようなものが刻まれている。その中心地点には裸体の少女が横たわっている。長い尻尾、体中を藍色の和毛にこけが覆っている肢体、頭頂に短く鋭角に突き出た耳——猫のような容姿は、彼女が孤猫族イエネコであることを物語っている。

男は無言のまま中心地点に近付くと、少女を抱き起こした。少女は意識を喪失している。

「可哀想に」

男は目を伏せて、悲哀を浮かべながらそう言うと、インディゴを背に担いだ。男が数歩、来た道に戻ったとき、ジープ型の車が一台近付いてきた。乗っているのは獣の容姿を持った者達だ。螺旋を描いた角ヤギを持っているところを見ると、弓角族ヤギのようだ。どうやら彼

等は少女を回収しに来たようである。

「早いな」

男は知らぬ間に急ぎ足になる。

「……！ 何者だ！」

途端に誰何の声が男に掛けられる。その言葉は、同時に制止の意味も含まれていた。だが、男がそれを聞き入れるはずもなく、今や駆け足となった足はそのまま回収班が来た方向の対角へ向かっていく。

「止まれ！ 止まらないうと撃つぞ！」

「娘を放せ！」

その言葉を耳にするよりも早く、男は銃身の長い銃を取り出して、抜き撃ちで回収班の男達を撃ち抜いていく。男はこういう事には慣れているのだろう、その手つきは鮮やかだった。乗り手がいなくなったジープ型の車は、暫くはそのまま慣性で走り続けたが、石に乗り上げて引っくり返ってしまった。男はその様を見届けると、即座に踵を返し、走り去って行った。残ったのは腹を剥き出しにしたジープだけだった。

洞窟の中、男は焚き火に火を起している。てらてらと光る灯りは洞窟の凸凹の壁面に反射して、岩の赤い色合いを如実に照らし出していた。そこは大地の隆起によって起きた小山の中腹であることが解る。岩が隆起して出来たそこは、岩石がごろごろと転がっている。男の対面には焚き火を挟んで少女が横たわっている。先ほど男が連れ去った少女だ。少女は静かに寝息を立てている。和毛の無い二足歩行動物——人間である男とは似ても似つかないどころか、種族同士で敵対関係にあるもの同士だ。その男が、静かに少女の目覚めるのを待っている。裸体であった少女には毛布代わりのマントが掛けられている。火が点いて、数瞬の後に少女は目覚めた。

薄ぼんやりとした視界の中、ただ赤々と燃える焚き火の火が眼に飛び込んできた。ぼんやりとした頭でその奥に人が座っていること

を認識する。認識した後で、ふと何かに気付き、被せてあるマントの中を覗く。途端に、少女の頬から耳にかけて朱に染まり、小さい悲鳴を上げた。マントの中は赤裸々だったからだ。糸纏いぬその様を見て、ついで男と自分を交互に見遣り、ますます朱に染まった頬を色濃くしていく。少女の疑いの視線を受け、男は苦笑いを浮かべる。

「気が付いたようだね。……はっは、安心したまえ、君には手を出してはいない。君に手を付けたら、怒られてしまうよ」鳶色の目が笑っている。

「……誰？」

少女は、誰に？ と問いかけたい衝動を抑え、誰何に留めた。その声は、小さく、弱々しかったが、よく通る声なので相手には伝わっているだろうと、少女は男が言葉を発するのを待った。

「ああ、すまない。名乗るのが遅れた。俺はハーベイラス・エコーと言う者で、アルセナヴィツチコフの友人だ。ハーベイでいい。……君は、インディゴ・ブルーだね？」

アルセナヴィツチコフと言うのは、獣人世界における伝説の人だ。少女と同じ藍色の和毛を持っている。伝説に名高いその人の名前を聞いて、少女は少し警戒を解いた。だが、まだ油断してはいない。

「おじさん、アルセナヴィツチコフを知っているの？」

「ああ、古くからの友人だよ」

「どうして、私の名前を……？」

「アルが予言したからさ」

「予言？」

「……君は服を着たほうが良い」

あえて話題を逸らしたのだろう。その言を受け、インディゴは思いついたとしても言わんばかりに、顔から火が噴出したように真っ赤になる。

実際、インディゴたち獣人は体中和毛で覆われているために、若干の寒さには強いのだ。人間達よりも遥かに。体毛が無いのは腹部

と胸部だけで、あとは柔毛に覆われている。その柔毛が寒風を防いでくれるのだ。だから獣人達はもとも服を着る、という文化を持つていなかった。多少の布切れを身に着けるぐらいだった。その獣人達に服飾文化を持ち込んだのは、他でもない人間だった。そして、服飾文化が広く浸透していったとき、純粋な獣人達に恥辱という感情が芽生えた。

ハーベイは自身の荷物の中から代えの服を取り出すと、「男物だが」と断りを入れてインディゴに手渡した。そして自分は「何か、食べるものを獲ってくる」と言い置いてライフル銃を手にすると、洞窟を出て行った。それが彼の配慮なのだと解るのに、さほど時間は要しなかった。

インディゴは遅々として着替え始める。ふと何かに気付き、胸の直ぐ上、左右の鎖骨の真ん中に手を当て辛そうに目を瞑る。掌の下には研究所にいた頃につけられた刺青がある。割り振られた番号と共に研究所の名前が彫られてある。とても辛い記憶だ。暫しの間、そうしていたが、暫瞬の後に着替えを再開した。

ハーベイが兎を数匹手に戻ってくると、既にインディゴの着替えは終わっていた。大きいサイズを無理やり着込んでいる風は隠せないが、他に服が無いので今のところは止むを得ない。どこか町に着いたら女物の服を買ってやろうと、彼は思った。

ハーベイは獲ってきた兎の喉元に小刀を当てると、躊躇無く裂いた。多少血飛沫が飛んだが、インディゴにはかからない様な向きを向いているので問題ない。インディゴは一瞬肩を竦めたが、目を瞠っている。ハーベイはそのまま首を切った方とは逆の方に逸らし、全ての血液を出し切るまで出す。出し切った後で、兎の足を四本切断し、毛皮を剥ぎ取る。兎の足は旅のお守りにするための物だとか、毛皮はいい値段で売れるだの、逐次説明しながら他の二匹も同じように作業していく。慣れているようで、手際は良かった。一匹分を拾ってきた木の棒に突き刺し、股のように分かれた木の棒二本を焚き火の対面になるように地面に突き刺し、その上に兎肉を突き刺し

た棒を乗せる。これで簡易式のグリルの完成だ。残り二匹は塩漬けにして保存食にするつもりらしい。

「食べないのか？」

兎肉が焼きあがって、ハーベイはナイフで裂いて食べている。インディゴの分も小皿にとってあるが、インディゴは手をつけていない。

「食べたくないのなら、食べなくて良い。食べなくなったら食べる」

「……………おじさんは人間でしょ。どうして私を助けたの」

「それか。んー、アルに託されたから、じゃ不服かい？」

「……………」

「わかった、わかった。じゃあ、話してあげよう。長くなるが……、俺がアルと出会ったのは、ほんの偶然だった。俺は旅をしていた。自分を探す旅だ。とても長い旅だった。その旅の最中、俺は妙な噂話を耳にした。“世界のへそ”と呼ばれる森の奥から、男の呻き声のようなものが聞こえてくる、というものだった。俺は確かめずにはいられなかった。もともと当ての無い旅だったし、好奇心が強い方なのでね。俺は一人で“世界のへそ”に足を踏み入れた。……正直驚いたよ。そこは、まったくの別世界、異界にも等しき世界だったからだ。この世のものとは思えない極彩色に彩られていた。その森は、迷いの森とも呼ばれていて、導きの鈴が無いと迷って出られなくなるのだそうだ。俺は、導きの鈴を持って入ったから迷うことは無かった。何日彷徨っていたらう。その森では昼と夜の境目が無くて、歩き続けて、疲れたら寝るを繰り返した。その森の中には不思議と襲ってくる動物がいなかったから、安全は保たれていたんだ。寝るときは森の木々や草叢がどいてくれた。不思議な森だったよ。まるで生きているような。……何処まで話したっけな。……………：ああ、そうだ。ともかくそうやって何日も彷徨った末、突然開けた場所に出た。そこには、驚くべきものがあつた。獣人が、木に喰われていたんだ。——いやいや、嘘えじゃない。本当に喰われていたんだ。そいつは気だるそうに眼を開けると、俺を認めてこう言っ

たんだ。「ああ、人が来た」そう言って、その獣人は微笑んだ。驚いたことに、そいつは生きていたんだ。それから、俺たちは親交を深めていった。

いろいろな話をしたさ。俺が旅で出会った様々なこと。そいつの身の上に起こった出来事。藍色の伝説のこともな」

薪が弾け、炎が揺らめいた。ハーベイは新しい薪をくべる。

「そして、俺があいつの元を去ろうというときに、あいつは言ったんだ。お前のことを頼むと。そいつがアルセナヴィッチコフ。毛色はお前と同じ藍色だった――」

炎がぱちと爆ぜた。

「教えて。私に、何があったの？」

発問したインディゴの瞳は真剣だった。

二（前書き）

多少、残酷描写があるかもしれませんが。注意してください。
萌え属性ではありません。

二

モニターに、深き青の和毛を持つ少女、インディゴが映っている。インディゴは、炎が燦っている町の中を歩いていた。そこは、人間達が作った人間達のための町だ。本来ならばインディゴのような獣人がうろついていたいい場所ではない。インディゴは白い貫頭衣を来ている。丈が長く、裾が膝下までである。胸の刺青は露になっている。彼女がこの世界に生れ落ちてから、十五年の月日が経っていた。目が覚めたらここにいたのだ。誰が、どのようにしてつれて来たのかも解らない。ただ、ここにいた。町は滅びの道を突き進んでいた。

インディゴは獣人の中において、至極稀な藍色の毛色を持つ少女である。藍色の毛色を持つものは“藍色の力”と言うものを持っている、獣人達の間ではそう、信じられていた。彼女にもかつてアルセナヴィッチコフが持っていたものと同じ力が備わっているのだ。しかし、彼女の内に眠る混沌とした、破壊の衝動はその捌け口を探して燦っているままだった。

インディゴは虚ろな瞳を泳がせていた。何かを探している様でもあり、心ここにあらずといった様でもあった。だが、探し人は見つからない。そればかりか、同族の姿はどこにも見当たらなかった。理不尽すぎる自分の置かれた環境に、苛立つてすらいた。この町がこの様な仕打ちを受けている理由も、解せない。この町は自分の町ではない。自分の生まれ育った町ではない。だが、だからといってこの様な虐殺を行って良い人間は——獣人も含め——誰一人としてこの世に存在していない。自分の瞳に、まざまざとその光景を焼き付けられているのも、堪らなく嫌なのだ。出来得る事ならば、目を瞑って過ごしてしまいたい。

インディゴは気付いていなかったが、瓦礫の中からインディゴの足首へと伸びる手があった。火傷を負った、酷く脆くなっている手。

それは、人間の手だった。この町で生まれ育ち、そして今当にこの町で死出の旅に出ようとしている人間の、手。焼け爛れてはいたが、見た目女性のそれだと判る。その手が突然蛇の如く伸びてきて、インディゴの素足を握った。瓦礫の中から覗いた顔が、インディゴを仰ぎ見る。インディゴが驚いて後ろを振り向くと、その女とまともに視線がぶつかった。女の眼は虚ろで、宙を彷徨っている。焼き切れた唇を微かに動かし、言葉を紡ぐ。

「……返せ……。……。返してよ……。……。私の、家族を！

……家を！ 返してよ！ 私の、……。生活を……。！ この……。、
獣人め……。！」

それは、悲鳴に近かった。

自分達の生活を侵された苦しみや、自分達の人生を破壊された憤りに満ちた言葉だった。

その言葉、その想いに触れ、インディゴは言葉を失った。紅い大きな瞳を驚愕に見開いて、女を凝視する。かつて、幸せを謳歌していた女を。私はやっていないとでも言いたげに、首を振りつつも数歩後退る。

獣人による解放戦線の火蓋がここまで迫ってきているということなのだろう。しかし、これでは最早解放戦線などではない。殺戮であり、人間種族に対する侵略だ。いつからだろう。解放戦線が歪んでしまったのは。当初抱いていた筈の“大義”などは何処かへ捨ててしまったようだ。この戦いの果てには、唯、死の荒野だけが広がっている。

死だけを望む戦いなんて、とインディゴは嫌悪感を覚え吐き気を催した。

（コンナモノハイヤダ。……。コンナセカイ……。キエテナクナレバイ
イ……。！）

この戦いに対する嫌悪感、死に対する嘔吐感、逃避願望、そう思った想いだけがインディゴの中で膨らんでいく。心の中で負の感情が膨張し、爆発し、満たされていく。己自身の中で“力”が解放され

たことを覚えた。無限の破壊の衝動が広がってゆく。インディゴは苦悩に顔を歪ませた。その一瞬を境に、意識が暗転した。

彼女の全身が一瞬にして逆立ち、藍色の淡い光に覆われていく。そしてその光は周囲の全てをなぎ払いながら満ちていった。

人間の町を飲み込むように、藍色の花が咲いた。それは綺麗な球体で、蒼い月が大地に根付いたようにも見えた。それは、伝説に名高い？藍色の力？が解放された瞬間だった――。

「この通り、恐怖と絶望と、不安と憤り。負の感情が正の感情を押し潰したときに、それは発動します」

巨大なモニターを前に、ずり落ちそうな眼鏡をかけた白衣の男が説明する。男の容姿は獣人特性の無い、人類――人間であった。男が前にしているのは、種族特性をそれぞれ持っている獣人類たち、解放戦線の上層部のお歴々である。毛色はさまざまで、階級がバラバラなのが伺える。

「ふむ。確かに、その通りのようだな」

ヤギ科の男が口を開く。

「しかし、この力をどのようにしたら、我らの意のままに操れるのかは結局解らず仕舞いではないか」

ネコ科の男も続いて口を出した。

「ご安心を。感情のコントロールについては、既に研究しており、完成段階にあります」

人間の男が余裕の笑みを漏らす。

「して、彼女の確保は出来ているんだろうね？」

イヌ科の長老が口を挟む。言外に、出来ていなければ意味がない、と言っている。人間の男は大きく溜息を吐き、肩を竦めて見せる。

「それが、何者かに奪われまして」

言外にお前達獣人族がへまをしたからだ、と言っている。

「それでは意味が無いではないか！ アルセナヴィッチコフが姿を眩ませてから、十六年も経っているのだぞ！ 彼女は、アルセナヴ

イッチコフに並ぶ力の持ち主なんだ。彼女の重要性をもっと考慮したまえ」

サル科の男の叱咤に、

「――直ちに確保せい！」

イヌ科の長老の恫喝が重なった。人間の男がすぐさま了解の意を伝える。お前達獣人がへまをしたからだ、という思考は伏せたまま
で。

獣人たちが退室していき、室内が暗くなる。密かにほくそ笑む男
だけが残された。

三

炎が揺らめき爆ぜた。

「研究所に友達が捕らわれているの。彼等を助けないと……」

インディゴが口を開く。炎の揺らめきだけを見詰めながら、思い詰めたように言葉を紡ぐ。

「しかし、今研究所に近付くのは危険だぞ？」

承知で言っているのかと、言外に追求するハーベイ。その目は真剣にインディゴを案じている視線だ。

「でも、助けないと！」

今度はハーベイを真っ直ぐ見据えて言い募る。少し語調が荒いのは感情の昂ぶりからだ。

いいんだな？ と視線で確認をとるハーベイ。インディゴは首肯で応じた。

洞窟を出ると、もう空が白み始めていた。黒い天幕が紺色に変わり、東の空から曙色をまとった太陽が顔を覗かせている。グラデーションがかったパステル調の空を見上げ、太陽の方角――東へと歩を進める。ここから東に行った所に町があると、ハーベイが言ったからだ。その言葉を信じて、インディゴは歩を進める。次の町では少し買い物をしよう、とハーベイは話しながら歩く。インディゴはそれを聞くとともに無しに聞いていた。

洞窟のあった岩場を出ると、草原が広がっていた。徐々に暁色に染まり、色を取り戻していく。ややもすると、黄緑色の草原が目前に広がっていた。岩場の陰になるように、ジープが止まっていた。軍用のカーキ色のジープだ。ハーベイは運転席に乗り込むと、手招きでインディゴを呼ぶ。乗れ、というのだ。インディゴは黙って従った。

二日後、二人は少し大きめの町に辿り着いた。

その町は、周囲を鋼鉄の外壁に覆われ、鉄の門扉が硬く口を閉ざしていた。さながら城塞都市だ。その町を指差して、ハーベイが言った。

「今夜はあそこに泊まろう。君の服も買ってあげるよ」いつまでも男物ではかわいそうだと笑った。

「カウボーイハットは目深にかぶって、できるだけ容姿を隠すようにするんだ」

ハーベイの忠告どおり、インディゴは服を着替えるとカウボーイハットを目深にかぶり、マフラーを口元と首を隠すように巻いた。そうすると、ほとんど容姿が隠されるため獣人であることを隠すにはうってつけだった。

街壁の検閲を済ませると、大通りを通って町の中央に向かった。町の中央には行政塔が立っていて、その周囲で市が立ち並んでいる。二人はそこへ向かっているのだ。市場には様々なものが並べられていた。錫で飾った首飾りや、翡翠の勾玉、ずっと南の地方でしか採れない果物や、金銀錫で飾られた衣装など。ハーベイはそれらの中から紫色のワンピースとフード付きのマントを買った。瑠璃色と萌黄色の貫頭衣とスカートも何着か購入する。さらに、弾薬も何百と補充しておいた。

周囲には高層建築物が立ち並んでいる。その周囲を囲むように、家々の軒並みが立ち並んでいた。

インディゴは目深に被ったカウボーイハットを押さえながら歩いている。風で飛ばないように注意しなければならない。もし、この帽子が曝け出され自分の顔や耳が露になったら――恐ろしさに身震いする。

この世界で獣人は隠さなければ生きていけない。少なくとも人間の町ではそうだ。ばれれば見世物にされて、奴隷のようにこき使われ、捨てられるのがオチだ。そういう世界なのだ。だからこそ、獣人による獣人のための解放戦線が蜂起したのだ。彼等は彼らなりに

同族の事を想っているのだ。だが、やり方が問題である。と、インディゴは思う。確かに、民族解放には同意できる。だが、だからといって、戦争を起こしていいとは思わない。そのための力を得ることも、だ。自分の力が何のためにあるのか。それが知りたい、と思った。ただ、破壊するためだけの力なんて――。

それまで自身の沈考に氣をとられていたインディゴは、ハーベイの口の動きにやっと反応した。彼はこう言っていた。宿を取ろうと。宿が市の近くに数軒と、少し路地を入ったところに数件ある。一番安いのは壁伝いに有る宿だけれど、そこが空いているかどうか分からないから端々を当たっていこうと。そのついでに先日獲物で得たもの――ウサギの足と血液と肉を少し売っていこう。彼の提案に、インディゴはただ頷くしかなかった。

インディゴは旅のいろはをまだ知らない。十二歳になるまで村から出たことはなかった。それも虐げられた生活を送っていた。母親も、父親も、誰もインディゴのことを大切に扱ってはくれなかった。希望が絶望に変わったからだ。そう、目が教えてくれた。今でも思い出す。彼らの黒き感情を――。

アルセナヴィツチコフが姿を眩ませてから一年の後、インディゴがこの世に生れ落ちた。アルセナヴィツチコフと同じ、藍色の体毛を持って――。両親は大層喜び、三日三晩の宴が繰り広げられた。内に眠っている“藍色の力”に期待の眼差しを向けられ、インディゴは育まれた。しかし、やがて失意の念が入り混じり、失意はやがてどす黒い何かに変わっていった。インディゴを見守るその眼差しは次第に曇ってゆく。インディゴがその内に伏する力を目覚めさせることは無かったからだ。

インディゴは、棘を背負って成長した。針の筵はそのまま家族の不和になった。父親は事あるごとにインディゴを怒鳴りつけた。言葉で圧服できないときは、拳が飛んだ。まだ幼いインディゴは、涙の海に沈みながら従わざるを得なかった。恐怖に打ち震えながら過

ごした幼少期は、そのまま精神に傷跡を残した。深く抉られたその傷跡は、綺麗に癒えることは無かった。

心に癒えること無き傷跡を抱いたインディゴは齡を重ね、十二の年月を経ていた。十二歳になるまでに、一度として藍色の力を解放していないインディゴを、役立たずなインディゴを、周囲の者達はぞんざいに扱っていた。そんな、居た堪れない十二歳のある日、唐突に、何の前触れも無く、それはやってきた。

ゲリラの兵士がインディゴを迎えに来たのだ。迎えに来たとは語弊があるが、彼女を強く欲しているためにゲリラの一員として迎え入れようとしてきたのだ。家族は最初、拒絶の色を見せたが、金をチラつかせると賛同に摩り替わった。その瞬間、インディゴにとっての全て――父親も、母親も、自分を取り巻く全てが信じられなくなった。世界が、グニヤリと歪んだ気がした。

呆然と立ち尽くすインディゴを、ゲリラ兵がそつと触れ歩き出すように促そうとした。途端にインディゴは弾かれたように走り出し、その場から逃げ去った。ともかくゲリラ兵から遠ざかりたい、自分の生まれた場所から出来るだけ遠くへ逃げたい、そんな思いが錯綜する。だが、思う通りにはならなかった。

兵士はインディゴの逃亡をまるで予期していたかのように、迅速に行動した。それは規律正しいゲリラ軍にあって、当然の動きだった。インディゴがいくら力一杯走ったところで、所詮子供の足。成長期とはいえ、筋力と体力に限りがある。大人で構成されたゲリラ兵士達にとって見れば、子供のおいかけっこに等しかった。辻で兵士に出会うたびに曲がり、大通り、路地裏問わずインディゴはひた走った。途中、何度も転びそうになったが堪えた。だが、所詮子供の体力では大人には敵わず、町の出入り口付近で敢え無く捕まった。「はなしてえ！」

「お嬢ちゃん。お嬢ちゃんの力は特別だ。だから、我々にその力を貸して欲しい。我々は今、過渡期に差ししかかろうとしているのだよ」そう言っている兵士の目は情熱に満ちていて、どこか信じるに足

るものを持っていた。だから、インディゴはこの人の言うことなら信じてもいいと思った。

そして、インディゴは大人しくついていくことにした。どうせ、故郷の町にいたところで自分の居場所などないのだ。だったら、せめて自分を必要としてくれる人たちの所に居たい。それが、今の彼女の望みだった。

インディゴは町人に見送られることなく、故郷の町を後にした。運命が動き出した瞬間だった。

三年間、孤児院と呼ばれる白い建物に入れられた。その間、投薬と検査を繰り返した。白い貫頭衣を着させられ、胸に番号と孤児院の名前が焼きこまれて。奴隷よりももっと酷いとインディゴは思ったが、その言葉を口にした者の末路がどうなったのか知っていたからあえて口にしなかった。

三年後、孤児院を出ることになる。

それまで、旅らしい旅をしたことは無かった。

だから、だから旅というものを知らない。

気がついたらインディゴは、一つの宿屋の前で立ち止まっていた。看板には“雌鹿の嘶き亭”と書いてある。

「どうした？」

ハーベイが質疑した。インディゴはただ首を振るだけ。実際、解らなかった。なぜ自分はここで立ち止まったのか。ただ、気になる気配を感じたから。だから立ち止まった。

「ここがいい」

この街へ来て初めて自己主張をしたインディゴ。あまりのことに、暫くハーベイは呆けた。だが、直ぐと微笑に変わり、インディゴの手を引いて“雌鹿の嘶き亭”の扉を潜った。

四

その日の夜。

いくつも並ぶテーブルを囲んで男達が荒々しい笑い声を立てていた。酒色を帯びているところを見ると、どうやら酒を酌み交わしているようだ。マスターがカウンターの奥で客の注文に応じている。下卑た笑い声の中に、かすかに珠玉の音色が混ざっている。酒場の奥まったところで吟遊詩人が美声を披露していた。

宿屋の一階は酒場になっていた。夜ともなると程よい賑わいを見せている。この街の工夫などが出入りしているらしく、お世辞にも余り上品とはいえない部類の店だ。店は噂話で持ちきりだ。やれ、隣町が消えたのだ、そういえば青い火の玉みたいなのを見た気がするのだ、あれはどこそこの新兵器だの、と事実を脚色も交えて話合っている。その酒場の奥に、インディゴが気になっていた気配の持ち主がいた。彼女は歌を歌っている。他愛も無い御伽噺だ。どこかの国の姫君が竜にさらわれて閉じ込められていたところを、どこかの国の王子様が助けに行く話。竜の正体は実は悪い魔法使いで、魔法使いと戦うために王子は魔法の鎧に身を包んでいったのだという。それでも魔法使いの攻撃は激しく、あわや、やられそうになったところを妖精が助けてくれたのだ。他愛も無い御伽噺。けれども真実味を帯びていた。

インディゴが無防備に近付いていくと、吟遊詩人の女はにこりと微笑み席を立った。まるで最初からインディゴが来ることを予期していたかのようだ。その振る舞いにハーベイは怪訝な顔をした。

「こんばんは。インディゴ・ブルーさん」

酒場の工夫たちは突然鳴り止んだ音楽に、怪訝な顔をして吟遊詩人のほうを振り向く。吟遊詩人はそんな工夫たちに、にこりと笑って愛嬌を振りまく。

近付いてみてはじめて気づいたのだが、その吟遊詩人の女は人類だった。ハーベイと同じだ。紗の布地を頭にかぶり、その白磁の肌を半分隠しているようだ。その面には屈託のない微笑が溢れている。身に纏っているのは、刺繍の入った長い布地を袈裟懸けにかけ、肩のところで止めている。下着は簡易的な貫頭衣だ。

「お姉さん、私のこと知ってるの？」

「ええ、あなたのことは良く知っていますよ」

ハーベイは警戒して、インディゴを庇うように吟遊詩人の女との間に入った。

「あんた、何者だ」

「ここでは話せません。上に行きましょう」

上とは宿屋の部屋のことを指している。この女もこの宿屋に部屋を取っているのかと、ハーベイは一つ頷いた。インディゴは吟遊詩人の女の意向に同意する意思を示している。

宿屋兼酒場の主人に断りを入れてから、階段をゆっくりと上っていく吟遊詩人。その後に静かについていくインディゴとハーベイ。酒場に居た常連客たちは静かに見送り、やがて酒飲に没頭し元の喧騒に戻っていった。

二階の一室。この部屋は吟遊詩人にあてがわれた部屋で、質素でいながら造りはしっかりしていた。部屋の中央には四角いテーブルと椅子が二つ。窓際にベッドがあつらえてあった。調度品らしい調度品は無く、衣装戸棚があるくらいだった。全て木製である。

自分の部屋に案内した吟遊詩人は、さて、と言い置いてから一拍置いた。しばし考える素振りを見せ、暫瞬の後に言葉を続けた。

「あなたは、仲間を助けたいと思っっていますね？ 多大な犠牲を払うでしょう。北に行きなさい。あなたには足りないものがあります。あなたはここより北の町に行って、ある人に会わなければいけません。それは過酷な旅になるでしょう。しかし、あなたの友達を助けなければ、その人に会うべきです」

吟遊詩人は真っ直ぐとインディゴを見据えて話している。鈴とした声音で、歌うように言葉を紡いだ。ここでいう“あなた”がインディゴを指しているのは間違いないだろう。インディゴが一拍置いて口を開いた。

「あなたは、何故私のことを知っているのですか？」

「あなたのことなら全てを知っています」

間をおかずに、躊躇いも戸惑いも見せずに言い切った。完全に、自分を信じている言動だった。

「全て。全てと言ったな。あんたに何が解る。……この子の何が解るっていうんだ！」

たまらずにハーベイが口を出した。それを受けて吟遊詩人がハーベイを真っ直ぐに見据えて言い放つ。

「私はこの子の全てを知っています。未来も、過去も。この子には、信じてくれる人々は居ません。村人も、両親も。あなたを見送ってくれた人たちは一人も居なかったでしょう？」

その言葉を聴いて、インディゴは悲色を浮かべた。

「あなたは、何者なんだ」

ハーベイがインディゴを代弁するかのように言った。

「私の名前はルリィ。見ての通り吟遊詩人をしています」

「吟遊詩人……その言葉をそのまま鵜呑みにしろと？」

「そうして頂けると助かります」

彼女の頭を覆っている紗がさらりとなびく。どうやら小さくお辞儀をしたようだ。優雅でいて、嫌味がない。洗練された大人の女性だ。そのように出られると、もう何も言うことは無く、ただ彼女を信じるしかなかった。

「どうする？」

二人にあてがわれた部屋にて、ハーベイが開口一番に言った。言外にあの女を信用していいのか、と言っている。瞳は信じていない。見ず知らずの他人をあまり信用するものではない、と瞳で物語って

いた。

「私は信じてもいいと思っている」

インディゴが言った。何故かはわからない。しかし、あの人には何か特別な匂いみたいなものがある。それを感じ取ったのだ。だから、この宿屋に来た。だから、あの女の人の話を聴いた。信じてもいい。あの女の人の人なら。ハーベイは、インディゴのその言葉から得体の知れない何かを感じ、戦慄を覚えた。

「しかし――」

と、ハーベイは言い募る。しかし、彼女は得体の知れない存在だ。少なくとも、我々にとって益になる情報かどうかは今の時点では解らない。安易に人を信じるものではない。旅においては。旅においては、もっと慎重になるべきだ、と。旅についてまだ何も知らないインディゴに、反論できる筈も無かった。でも――、私は私の感覚を信じた。ただ、それだけ。ただそれだけなの、と言ってインディゴはベッドに潜り込んでしまった。こうなってはもうお手上げだ。やれやれ、従うしかないのか。と、溜息をついて寢床にもぐるハーベイ。明日はあの女を信じて北へ行くしかないか。と呟いた。

五

翌日。朝日が昇ると同時にハーベイが起き、インディゴを起こした。直ぐに出立だ、と言って旅の支度を整える。インディゴはいまだ夢の中にあるようで、眠たそうに目を擦っている。暫し呆けてからハーベイの真似事をするように自身の支度もしだした。早めの朝食を食堂でとり、宿屋の主人に礼とシルス銀貨を渡して宿を出る。シルス銀貨は人間の町でしか通用しない貨幣だ。

朝日が昇ったとはいえ、町中は今だに明けきれていない。薄暗い中を市場に向かう人々がトラックを運転している。荷台には市場で売るものが山積みだ。町に入る者も、出る者もいる。静謐な空気の中、二人は北へと向かう。

北の門番はあくびをかいていた。未明から番をしていたのだろう。今にも睡魔に襲われそうだ。二人は静々と近付くと、門番に通行証を見せ、一礼した。門番は礼に応え、世間話を始めた。これから北へ行くのかい？ ああ、そうだ。ハーベイが答えると、それに答え、これから北は雪に閉ざされるよ。大丈夫なのかい？ と心配してくれる。ハーベイは荷物の一部を見せ、なあに、大丈夫さ。装備なら万全だ。と、応じる。いつの間にも買ったのだろう、二人分の冬の装備が揃っていた。毛皮の服にスボン、耳付き帽子、ブーツまで揃っている。ふわんふわんの毛皮で覆われたマントまで有った。ハーベイのものはあらかじめあったとして、インディゴの分はこの町で買い揃えたのだろう。その一揃えを暫く見詰めていた門番は、ひとつ頷くと通してくれた。

無事に人間の町を抜けると、ハーベイはジープを北へと走らせた。暫く走り町との距離が十分に離れたところで、インディゴは溜息を一つつくどやっとフードを外した。ほっとしたのだろう。安堵の色がその顔に窺える。

ジープは暫くヒースの荒れ野を駆け抜けた。北に近付くにつれて、白いひとひらが舞って来た。吹雪いて来るかもしれない。

暫くいくと、北に山が聳え立つ。やれやれ、ジープは置いていくしかないな。ハーベイが舌打ちした。麓で車を止めると、ハーベイは荷台においてある荷物の中から大きな一枚紙を取り出し広げた。インディゴが覗き込むと、それは地図だった。メルカトル図法による精細な地図だ。コート紙には一つの巨大な大陸が描かれている。パンゲアと呼ばれている大陸だ。世界にはこの大陸一つしかなく、海を渡って行き着く先はこの大陸の反対側だった。それはここに生活するすべての人間が知っている事実だ。

地図を覗き込んでみると、中央よりやや右寄りに山がある。山に連なる山脈も描かれてあった。その直ぐ下には町があった。

「ここが現在地、と」

ハーベイがひとりごちる。今日の前にある、海拔八千メートル以上もある山を越えるのは難しそうだ。しかたない。遠回りをするしかないか、と独白した。その時だった。今まで黙って見ていたインディゴが地図の一点を指差した。

「ここを通れって言いたいのか？ この山は海拔が八千メートル以上もある山なんだぞ。しかも今は冬間近だ。越えられるわけがないだろう」

ハーベイが否定する。それでもインディゴは譲らなかった。

「……………わかった。ここに何か道があるんだな」

やっと理解されたのが嬉しかったのか、インディゴが口元を綻ばせる。ハーベイはそれを正解の合図だと受け取った。

海拔八千メートルのダリア山。大陸の造山運動によって出来た山で、最大級とされていた。左右に延びる山脈が北と南を分け、北方は雪に閉ざされた極寒の地と目されていた。昔は活発に噴火していたダリア山も、今は休んで久しい。北方からの北風で降った雪で万年雪が冠されている。数多い登山家も、この山を制覇するのを夢見ている。

その雪に閉ざされようとしているダリア山に、二人は挑もうと
していた。

「抜け道があるのか？」

荷物を背負ったハーベイがインディゴに訊ねた。ジープは麓に置
いて来てある。巧妙に隠しておいたから誰かに見つかる心配はない
だろう。二人とも今は冬の装備に身を包んでいた。

インディゴは首肯で返した。

インディゴは思い出していた。この山を抜けたあたりにある町の
記憶を。

「来い！ 来るんだ！」

「えーん」

インディゴは自分より幼い子供が泣いているのを見詰めているだ
けだった。現時点では自分には何も出来ないと言うことを早くから
悟ったのだ。

インディゴを含め、数名の子供達はゲリラ兵に連れられて山に登
っていた。標高三千メートルのダリア山である。山を登るとはいえ、
道なき道をただ闇雲に登っているわけではなく、決められた道を登
っているようだった。ただ一点を目標して。

子供達はインディゴと同じように原色の子供達だった。同じ獣人
類ではあるが、赤なり白なりの一般的ではない毛色をもっていた。
インディゴは幼いながらも彼らも自分と同じなんだな、と感付いて
いた。

猛吹雪が突然一行を襲った。何の前触れもなく訪れたそれに、足
跡たちが消されていく。一行は暫く収まるまで止まっていたが、吹
雪が和らぐと今の内にと足を進めた。草むらの目印、一本杉につけ
られた刀傷の目印、積み重ねられた石の目印を経て、ようやく一
息吐ける場所、洞窟に辿り着いた。

「ここを抜ければもうすぐ町だ。灯りを」

リーダー格の男が言うのに合わせて、懐中電灯に光を点して渡す

男。白色の冷たい光が暗い洞窟を照らし出した。てらてらと光る岩壁は凍っているようだった。鍾乳石も所々見える。

男達が先導するように黙って歩き出した。子供達は後ろについて行くだけだ。ほとんど一本道だ。迷うことはない。二股に分かれている箇所や、三叉、またそれ以上の広場のような場所に来たときは鍾乳石に刻まれた線のような印を頼りにしていた。そうしてどれほどの時間が経っただろう、長い、長い、人生のような道のりを歩いてきた後に、突然空が開けた。出口だ、と思う暇も有らばこそ、目の前の絶壁の下に町が広がっていた。

インディゴの示した印を頼りに、二人は洞窟までの道のりを辿った。

三百メートルほど登った辺りであろうか、目の前にぽっかりと龍の口が開いていた。最初龍の口だと思っていたが、括目してみると洞窟の入り口であることがわかった。上下に伸びる鍾乳石がさながら龍の牙のように見えたのだろう。ハーベイが呆と立っていると、インディゴはさっさと入っていく。

「おい、ここがそうなのか」

無言。歩みを止めない動作で答えが返ってきた。

「やれやれ。行くしかないのか」

両腕を竦めて、溜息をつくハーベイ。そして荷物の中からランタンを取り出し灯りをつけると、インディゴの後についていった。

中は静かだった。人気がない。人の出入りの跡は見つけられたが、人影そのものは見当たらなかった。

「？ おかしいな。このルートが秘密の通り道なら、普通、見張りの一人や二人は立っていてもおかしくはないのに。おい、本当にこの道で合っているんだろうな」

「間違っではない。私の記憶が正しければ」

そうは言っても幼い頃の記憶だしな、と嘆息したが、今となってはインディゴを信じるしかなく、この洞窟を抜けるしか方法が無い

ことにもハーベイは気付いていた。

「お前を信じるしかない、か」

そう言って、インディゴの手を引いて再び歩き始めるハーベイ。どれだけの道を歩いたのだろう。暫く狭く真っ直ぐな道が続いたかと思うと、だんだん道幅が広くなって行って、二股に分かれている場所に出た。右が昇り、左が下りだ。どちらも鍾乳洞が続いている。鍾乳石の傷は左の道にあった。インディゴは迷わず左の道に進む。下っていく道を、滑らないように気をつけながら歩く二人。片手はしっかりと結ばれている。道は険しかった。上から釣り下がる鍾乳石と、下に堆積している鍾乳石とで空間が狭くなっているところを通らねばならなかった。階段式になっているところもあった。小一時間ほど下ると、平坦な道に出た。暫く狭い通路を歩くと、突然開けた場所に出た。

と、インディゴがハーベイの袖を引っ張った。この先に見張りがいる、と言うのだ。ランタンの灯りを消し、漆黒の闇の中慎重に歩を進めていった。

そこは広場のようになっていた場所だった。上下に伸びる鍾乳石で龍の顎あぎとの様に見える。五十メートル先に明かりが見えた。見張りか、と物陰に隠れた。見つかつてはいない。が、倒すべき相手であることは間違いが無い。ならば倒すしかないか、とハーベイは覚悟を決めた。

彼等はランタンを持っていた。相手側に灯りがある。これは有利だ。灯りをめがけて撃てばいいからだ。向こうからはこちらは見えない。複数いる。二人だ。どちらかを撃てばどちらかには気付かれてしまうだろう。ハーベイは銃に弾を込めた。いつも使っているスナイパーライフルではない。サイレンサーをつけ、防音効果を高めたアサルトライフルだ。貫通力と射程を高めたカリス社のK256だ。ハーベイは遮蔽を取りながら銃を撃った。

ハーベイの撃った弾は立っている見張りの頭蓋を貫通し、洞窟の壁にめり込んだ。見張りの内のもう一人が射撃音に気付き、何事か

叫ぶ。その瞬間を、ハーベ이의銃弾が襲った。開けていた口を通して、頭蓋を突き破るか破らないかのところで止まった。

「ふう。終わったな」

物陰から出る二人。見張りは二人とも倒したので、連絡される心配は無いだろう。二人の戻りが遅いのを不審がるかも知れないが、それは先のことである。ハーベ이는一応念のため、と無線機を手にした。

出口までは一本道だった。

標高五百メートルの中腹に満天の星空が、ぽっかりと切り抜かれていた。

「出口だ！」

ハーベ이가満面の笑みを浮かべ叫んだ。

と、無線機に定時連絡の通信が入る。

「あー、異常なし」

ハーベ이가通信機に話しかける。声色を出来る限り見張りの人物に近づけて。隣でインディゴが吹き出しそうなのを堪えている。その、笑みを浮かべた表情に、ハーベ이는癒された。

出口の穴から這い出ると、棚状の足場になっていた。吹きすさぶ寒風がフードをはためかせる。

「あれが、獣人の町」

インディゴが指差して言った。見ると、確かに眼下に町の明かりらしきものが点在している。獣人の町、と聞いてハーベ이는フードを目深に被った。

暗闇の中、灯りを頼りに足場を確認しながら慎重に降りていく。門に近付くと、呼び止められた。誰何に答えたのはインディゴだった。

「何者だ！」

「怪しい者ではありません。私達は獣人で、ここを目指すように言われてきたものです」

各地の人間の町に残っている獣人達は、まだ解放されていない。

その獣人たちを、解放戦線は解放していつているのだ。

「……黄金の」

「支配者」

「よし、通れ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0656x/>

藍—AI—

2011年10月18日03時32分発行